口内炎には甘草やキハダの樹皮効果

Q 口内炎が繰り返しできて困っています。内科の検査では異常なしとのこと。口の中に塗る抗炎症薬をもらっていますがはかばかしくありません。漢方によい薬はありますか。

A 口内炎は全身的な病気の症状として出ることもあるが、多くは消化器症状やストレス関連で起こる。このような口内炎には漢方薬が非常によく効くので試みる価値がある。最もよく使われるのが甘草瀉心湯（かんぞうしゃしんとう）である。

半夏瀉心湯（はんげしゃしんとう）の甘草の量を増やした処方で、甘草には抗炎症・鎮痛作用がある。甘草の独特の甘みが口内炎の痛みをすみやかに鎮静化する。ストレスや不規則な食生活、睡眠リズムの障害とともにできるもので、胃腸の具合が悪くなると口内炎ができる、という場合は必ずといってよいほどよく効く。

胃腸は丈夫でむしろ便秘しやすく、イライラして顔がのぼせ、憤懣（ふんまん）やるかたない、という時にできるタイプには黄連解毒湯（おうれんげどくとう）がよい。

逆にきゃしゃな体型でものごとに驚きやすく、内向的なタイプの人の口内炎には香蘇散（こうそさん）を用いるのがよい。

いずれの場合にも、黄柏（おうばく）というキハダの樹皮の生薬末（粉）を水に溶いて、口にしばらく含んでいるとさらに効果がある。